

平成 21 年 4 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520624

研究課題名（和文） 現代インド在地社会の民主化における価値と倫理の文化政治学

研究課題名（英文） Cultural politics of value and ethics in the democratization process in contemporary India

研究代表者

田辺 明生（TANABE AKIO）

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：30262215

研究成果の概要：

現代インド在地社会の民主化は、普遍主義的な民主主義の制度と価値が地域社会に受け入れられていく過程とみるべきではない。むしろ地域の人々が、民主主義の制度および精神と、在地の価値と倫理を結びつけようとする積極的な動きがある。オリッサ地域社会においては、ヒエラルヒーと支配の構造を批判しながら、同時に、多元的な社会集団がそれぞれ権利と発言権を獲得するために、新たに再解釈された平等主義的なカーストの枠組みが用いられている。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	630,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学

## 1. 研究開始当初の背景

現代インドにおいては、1992年の地方自治制度改革（パンチャヤット改革）にともない、在地社会における政治の構造と過程が大きく変動しつつある。特に注目されるのは、「留保枠」の設定・拡大による、低カースト

および女性の地域政治への参加である。従来、彼らは、支配カーストを中心とした派閥による政治過程から実質的に排除されてきたが、90年代以降の在地社会の「民主化」により、徐々に政治発言権を拡大しつつある。

申請者はこれまでの研究において、特に低カーストの政治参加に伴うカースト間関係

の変容に注目してきた。そして、インド在地社会において現在形成されつつある「民主政治」の実際は、インド憲法が想定したような個人の自由と平等を基盤としたものではなく、むしろカーストなどの集団間の平等な資源配分を追求するインド型ローカル・デモクラシーとでもいえるようなものであることを明らかにしてきた。

本研究では、これまでの研究成果をさらに発展させ、1) 在地社会の民主化過程における価値と倫理の文化的ポリティックスの様相を明らかにすること、2) そしてそこにおける言説・思想の系譜を歴史的に位置づけることを試みた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、現代インド在地社会における民主化の倫理的基盤はいかなるものであり、それはどのような歴史的系譜を持つ価値なのかを明らかにすることである。この問題は、現在インドの論壇で展開しているポストコロニアル版リベラル・コミュニタリアン論争と直結する。つまり国家・社会の倫理的基盤として尊重さるべきは、近代国家が保証する権利なのか、それとも共同体に継承された徳なのかをめぐる議論である (Amartya Sen, 1999, *Reason before Identity*; Bose & Jalal eds. 1998, *Nationalism, Democracy and Development*; R. Bhargava ed. 1998, *Secularism and Its Critics* など)。本研究では、この論争における「国家／共同体」「権利／徳」「近代／伝統」といった二分法を凌駕していく可能性を現代のインド在地社会における社会政治変容の動態そのものの中に発見し、その歴史的意義を、過去300年余りの地域史のなかで明らかにしようとする。

## 3. 研究の方法

本研究では、1) 在地社会の民主化過程における価値と倫理の文化的ポリティックスの様相を明らかにすること、2) そしてそこにおける言説・思想の系譜を歴史的に位置づけることを試みた。

1) 現代政治過程の分析においては、上下のカースト間での、「あるべき政治・社会関係」はいかなるものであるかという価値・倫理に関する文化政治的な闘争と交渉の過程に特に注目する。上位カーストが多数決の原理と伝統的役割の言説を用いて、従来の資源分配の構造を維持しようとするのに対して、下位カーストは、政治の意味自体を、社会を構成する諸部分の代表が平等参加と協力を通じて全体の発展をめざすことと再定義しようとしているとみられる。これは、カースト間の関係を、ヒエラルヒーではなく、存在論的平等性に基づく供犠的奉仕を通じた全体の協力として再定義しようとする下からの文化政治的動きであり、さらにそうして再定義したあるべきカースト関係を在地社会における民主主義的政治実践と接合しようとする試みとして注目に値する。それは、単に資源分配という利害の問題にとどまらず、政治・社会関係のあるべき姿および民主主義の価値と倫理をめぐる、より根源的な政治的闘争が繰り広げられているアリーナである。本研究は、インド・オリッサ在地社会における、この対立と交渉の詳細を明らかにする。

2) 本研究のもうひとつの柱は、下位カーストが自らの文化政治的な価値的・倫理的立場を主張するさいに依拠していると考えられる、伝統思想における「存在論的平等性」の歴史的系譜を明らかにすることである。なおここでいう存在論的平等性とは、神は全て

のものに宿っており、信仰と修行によって誰もが救われるという思想であり、日本でいう如来蔵思想の原型である。現在のローカル・ポリティクスにおいて、下位カーストの平等性言説は、歴史的にカースト・ヒエラルヒーの批判基盤を提供してきた信愛（バクティ）運動および神秘主義における存在論的平等性の言説を充当（appropriate）し、近代的にアレンジしたものであるようだ。本研究では特に、オリッサ民衆の間で影響力の強いウトカリヤ・ヴィシュヌ派における存在論的平等性思想および供犠的倫理の、18世紀から現代までの歴史的系譜をあきらかにし、それが歴史的にいかにかからの社会的な抵抗と批判の思想的基盤を提供してきたか、さらにそれが現在いかなる言説形態をとってオリッサ在地社会のローカル・デモクラシーの形成に影響をあたえているかについて明らかにすることを試みた。

#### 4. 研究成果

現代における在地社会の変容は、ヒエラルヒーと権力の中心性という植民地下において強化されたヘゲモニー構造を乗り越え、サバルタンの供犠倫理と民主主義とを接合した「ヴァナキュラー・デモクラシー」の成立の可能性を示唆しているのではないかとのことだ。

ここでいうヴァナキュラーとは、実践と言説に関わる文化資源のうち、上から与えられた公式のものではなく、地域の生活世界において歴史的に蓄積され、実践倫理的に人々に身体化されたものを指している。ヴァナキュラー・デモクラシーとは、地域の生活世界に根ざした固有の実践と言説の様式と、民主主義の制度と精神とを、相互影響のうちに実践的に架橋した（あるいは架橋することを目指

す）政治と社会の姿を示すものである。

それは、近代国家の原理（権利・合理性）と現地社会の文化倫理（徳・供犠的奉仕）の対立という植民地的二分法を架橋する可能性でもあり、インド社会のポスト・ポスト植民地期への移行を示唆するものであると解釈できる。これは現在のポストコロニアリズムの枠組みを超えるための視座を提供することとなる。

また当地のヴァナキュラーな民主化において、多一論に基づく存在の平等という供犠思想が重要な役割を果たしたことが注目される。インドの供犠思想には、世界における多なる差異を認めつつ、それらを貫く一なる普遍性の中に存在論的平等性を見出そうとする多一論の哲学がある。こうした多一論を現代社会で生かすことに、お互いの違いを認め合いつつ相互の存在へ尊重と配慮をするヴァナキュラー・デモクラシーの可能性がみられる。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

①田辺明生「サバルタン・スタディーズと南アジア人類学」、『国立民族学博物館研究報告』、33巻3号、329-358頁、2009年、査読有。

②田辺明生「構造から生成へ—南アジア社会研究の過去・現在・未来」、『南アジア研究』、第20号、2009年、査読有。

③田辺明生「一八世紀インド・オリッサ地域社会における職分権体制——王権、市場、宗教との関連におけるその近世的性格」『西南アジア研究』69号 33-58頁、2009年、査読有。

④Akio Tanabe "Toward Vernacular

Democracy: Moral Society and Post-postcolonial Transformation in Rural Orissa, India” *American Ethnologist* 34 (3): 558-574, 2007. 査読有。

- ⑤ 田辺明生 「ヴァナキュラー・デモクラシーの可能性—ダルマ思想と現代世界」『21世紀フォーラム』No.106, pp. 20-27, 2007年. 査読無。
- ⑥ Akio Tanabe “Recast(e)ing Identity: Transformation of Inter-Caste Relationships in Post-Colonial Rural Orissa” *Modern Asian Studies* 40(3): 761-796, 2006. 査読有。
- ⑦ 田辺明生 「デモクラシーと生モラル政治—中間集団の現代的可能性に関する—考察」『文化人類学』第71巻1号 pp. 94-118, 2006年 査読有。

[学会発表] (計 4 件)

- ①2009年3月 “Political Ecology of Life: Ideas on Humanosphere” The Second International Workshop: “Biosphere as a Global Force of Change”, 9-11 March 2009, Kyoto University.
- ②2008年11月 “Cultural Politics of Life: Biomoral Humanosphere and Vernacular Democracy in Rural Orissa, India” (常田夕美子との共同発表). *American Anthropological Association* 107th Annual Meeting, 19-23 November 2008, San Francisco, California, U.S.
- ③2008年3月 “Cultural Politics of Life: Vernacular Democracy and Possibilities for Humanosphere-sustainable Development in Contemporary Rural Orissa, India” In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa: The First International Workshop, 12-14 March 2008, Kyoto University.
- ④2006年12月 “Bio-Moral Politics and Vernacular Democracy: On the Possibilities of Alternative Socio-Political Solidarities in Postcolonial India”. Joint Conference comprising the annual conferences of Anthropology Southern

Africa and The Pan African Anthropological Association and an Intercongress of The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 3-7 December 2006, University of Cape Town, South Africa.

[図書] (計 4 件)

- ①田辺明生 「民主主義——ばらばらで一緒に生きるために」春日直樹編 『人類学で世界をみる——医療・生活・政治・経済』、ミネルヴァ書房、pp.205-226、2008年、
- ②Akio Tanabe “Understanding Ethical Basis of Local Democracy: Towards Post-Postcolonial Transformation in Rural Orissa, India” In Northern South Asia: Political and Social Transformations (eds) H. Ishii, D. Gellner & K. Nawa. New Delhi: Manohar. pp.131-165, 2007.
- ③田辺明生 「中世・近世国家における王権イデオロギー—オリッサ・クルダー地方の事例から」、小谷汪之(編)『南アジア史 2—中世・近世』、山川出版社、2007年、260-266頁。
- ④Akio Tanabe *The State in India: Past and Present* (co-edited with Masaaki Kimura), New Delhi: Oxford University Press, Introduced (pp.1-34) and contributed a chapter “Early Modernity and Colonial Transformation: Rethinking the Role of the King in Eighteenth and Nineteenth Century Orissa” (pp. 202-228), 2006.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田辺 明生 (TANABE AKIO)  
京都大学・人文科学研究所・准教授  
研究者番号: 30262215

### (2) 研究分担者

### (3) 連携研究者